ひきこもり親和群における友人関係満足度と抑うつとの関連

渥美百合子¹・津川律子²(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード：ひきこもり親和性・抑うつ・友人関係

Relationship between the satisfaction degree in friendship and depression in affinity group for social withdrawal.

Yuriko ATSUMI¹, Ritsuko TSUGAWA²(¹ Graduate School of literature and social sciences, Nihon Univ., ² College of humanities and sciences, Nihon Univ.)

Key Words : affinity for social withdrawal, depression, friendship

目 的

近年、ひきこもりが注目され、多数の心理学研究がなされている (斎藤, 1998 ; 蔵元, 2008)。例えば、松本 (2003) は、大学生のひきこもりに関連する心理的特性に性差があることを指摘している。加えて、東京都青少年・治安対策本部 (2008) は、ひきこもりに対して親和的な考えを示しながらも実際にはひきこもっていない人々を“ひきこもり親和群” (以下、親和群) と定義し、親和群は一般群と比べて高い抑うつ傾向を有することを指摘し、ひきこもらずに留まっている要因として、良好な友人関係が維持されていることを挙げている。

高倉 (1995) や黒田ら (2004) の一般大学生を対象とした研究においても、友人関係の満足度と抑うつとの間に負の相関があることが示されている。さらに、多くの先行研究で、抑うつは男性より女性の方が高いことが明らかにされている (今野ら, 2010 ; 内田ら, 2008)。

しかし、東京都青少年・治安対策本部 (2008) で用いられている抑うつ測定尺度は、妥当性が十分に検討されていないものであり、親和群の抑うつ性の性差についても検討が行われていない。

そこで本研究では、抑うつ測定尺度に妥当性が確認されたものを使用し、親和群の抑うつについて性差を検討する。さらに、先行研究では検討されていない親和群の友人関係満足度と抑うつとの関連についても検討する。仮説 1) 親和群は一般群と比べ抑うつが高く、女性親和群は他の群に比べ抑うつが高い。仮説 2) 親和群の友人関係満足度と抑うつは男女ともに負の相関がある。

方 法

調査対象 大学生 256 名 (男性 110 名, 女性 146 名, 平均 20.02 歳, $SD=1.44$) を対象に調査を実施した。

使用尺度 (1) フェイスシート : 性別, 学年, 学科, 年齢の記入を求めた。(2) ひきこもり親和性尺度 (内閣府, 2010) : ひきこもりへの志向性やひきこもりに理解を示す傾向を測定する尺度で, “家や自室に閉じこもっていて外に出ない人の気持ちになる”, “自分も, 家や自室に閉じこもりたいと思うことがある”, “嫌な出来事があると, 外に出たくなくなる”, “理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う” の 4 項目から構成される。4 件法で回答を求め, “はい” (1 点) ~ “いいえ” (4 点) で採点した。内閣府の調査 (2010) で, 14 点以下の対象者を一般群, 15 点~16 点の対象者を親和群と規定しているため, 本研究においてもそれに従った。(3) 友人関係満足度 (丹野, 2008) : 最も親しい同性の友人 1 人を想定させ, その関係に対する満足度について, “非常に不満である” ~ “非常に満足である” の 7 件法で回答を求めた。(4) the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (米国国立精神保健研究所, 1997) の日本語版 (島, 1998 : 以下 CES-D) : 抑うつ性の自

己評価尺度で, 4 件法 20 項目で構成されている。

結 果

ひきこもり親和性尺度の得点を元に, 対象者 256 名の分析を行った (Table1)。ひきこもり親和性尺度の平均得点は, 親和群 15.60 点 ($SD=0.49$), 一般群 10.77 点 ($SD=2.35$) であった。

Table1 親和群と一般群の割合

	親和群	一般群	合計
男性	16 (6.3)	94 (36.7)	110 (43.0)
女性	19 (7.4)	127 (49.6)	146 (57.0)
合計	35 (13.7)	221 (86.3)	256 (100)

人数 (%)

ひきこもり親和性と性別によって抑うつに差があるかを検討するために, 親和群と一般群と性別を独立変数, CES-D 得点を従属変数とする 2 要因の分散分析を行った (Table2)。

Table2 親和群・一般群と性別を独立変数CES-D得点を従属変数とする2要因の分散分析

	男性		女性		性の主効果	群の主効果	交互作用
	平均	SD	平均	SD			
親和群	26.50	10.94	28.42	13.00	0.30	32.50 ***	0.24
一般群	16.94	10.28	17.06	9.23			

*** $p<.001$

その結果, ひきこもり親和性のみに有意な主効果がみられた ($F(1, 252) = 32.50, p<.001$)。

次に, 友人関係満足度と CES-D 得点の相関係数を算出した (Table3)。

Table3 親和群・一般群の友人関係満足度とCES-D得点の相関

	親和群		一般群	
	男性	女性	男性	女性
CES-D得点	-.64 **	-.23	-.21 *	-.09

* $p<.05$ ** $p<.01$

その結果, 親和群男性の友人関係満足度と CES-D 得点 ($r=-.64, p<.01$) との間に中程度の負の相関が, 一般群男性の友人関係満足度と CES-D 得点 ($r=-.21, p<.05$) との間に弱い負の相関がみられた。

考 察

本研究の親和群は 35 名 (13.7%) となり, 東京都青少年・治安対策本部 (2008) の 66 名 (4.8%) という結果と比較して高い割合となった。その理由として, 親和群は 24 歳以下に最も多く, 男女比は 3 対 7 であると指摘されている (渡部ら, 2010) ことから, 親和群が最も多く分布する年代を本研究の調査対象者としたことと, 女性対象者が多かったことが挙げられる。

仮説 1 を検討した結果, 渡部ら (2010) と同様に, 親和群の抑うつは一般群より高いことが示された。しかし, 性別による抑うつ性の差は認められなかったことから, 仮説 1 は一部支持された。女性の抑うつが高いことは多くの研究で示されており, この点については更なる検討が必要と考えられる。

仮説 2 を検討した結果, 親和群と一般群の男性のみに負の相関がみられ, 親和群と一般群の女性にはみられなかった。よって仮説 2 も一部の支持に留まった。友人 1 人に対する満足度のみを扱ったことが理由として考えられる。今後は, 友人関係の様々な側面を変数として取り上げる必要がある。